

文化



近現代史をめぐる

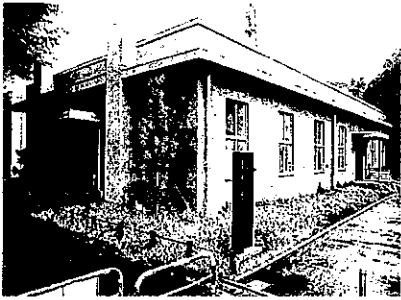
(14)

明治大・生田キャンパス(川崎市)は、若者たちが行き交う明るいキャンパスだ。ここにかつて、戦争の暗部ともいうべき日本陸軍の秘密施設があった。隠滅されたその歴史を、資料館に姿を変えた建物が、静かに語り続ける。

【栗原俊雄】

小田急線生田駅から歩いて10分ほど。緑に囲まれて、登戸研究所(第九陸軍技術研究所)があった。

1937年に開設。約36万平方メートルの広大な敷地内で、毒物や



資料館として保存・活用されている旧陸軍登戸研究所第2科の研究施設。川崎市多摩区の明治大生田キャンパスで7月20日、尾籠章裕撮影

◆川崎市 登戸研究所

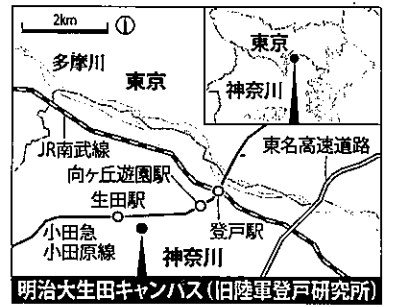


陸軍登戸研究所について話す元所員。右から河本和子さん、奥原タミさん、横山サト子さん＝川崎市で5日、栗原撮影

隠滅された兵器開発

生物化学兵器の開発、偽札製造などが行われた。軍と大学、民間企業からも研究者や技術者が集められ、最大約1000人が働いていた。

太平洋戦争中にここで開発された「風船爆弾」は、こんにゃくので貼り合わせた和紙の風船に15kg爆弾と数個の焼夷弾をつるしたもの。太平洋側から



放たれ、361個が米国に到達したことが確認されている。火事を起こし、死者もあった。元所員の奥原タミさん(87)は、爆弾が日本国内に落ち、女の子が負傷したという文書をタイプライターで打ったことを覚えていた。また別の元所員の回想によれば、毒物の開発過程では日本が占領した中国で人体実験が行われた。庶務を担当していた横山サト子さん(86)の仕事場には陳列棚があり、チョコレ

って」と振り返る。2010年3月、キャンパスの南側に登戸資料館(山田朗館長)がオープンした。もともと細菌やウイルスなど生物・化学兵器を開発していた同研究所第2科の施設で、37・41年ごろの建築。戦後は同大学農学部の研究棟として使われていた。山田館長によれば長年、学内でこの施設は、研究対象として十分に活用されなかった。「価値がよく分からなかった」からだ。だが近年、価値が見直され、研究も進んだ。

「トなどが飾ってあった。「食べなくてよかった。毒が入っていたかも」

戦況が悪化するなか、研究所も空襲を受けた。44年末から45年4月にかけて、研究所は長野や福井兵庫県に分かれて疎開。敗戦の8月15日、研究所に機密書類を処分するよう指令がきた。長野の疎開先にいた河本和子さん(84)は「泣きながら焼き

ました。戦争に負けたんだな、

キャンパス内には陸軍の星の印をつけた消火栓も残っている。正門の裏手にある動物慰霊碑は、研究所の実験で死んだ動物をまつったものだ。



遺構の一つ、当時の姿を伝える消火栓＝尾籠撮影

謀略戦の実相は

分かりにくく、教科書には載りにくい。登戸研究所の遺構群と資料館は、現代史の一面を伝える貴重な文化財であり、歴史教育の資源でもある。